

自由の翼を手に入れる 3つの財布

ハイブリッドワーク研究会

成田仁

この本は、あなたに新しい景色を見せてくれるだろう。

はあー。やっと終わった。

思わず独り言が出る。社会人になったばかりの頃は、会社で独り言をもらしている先輩や上司を見て、あんなふうにはなりたくないと思っていたのに。

なんていうか、独り言を言ったら負けみたいに考えていた。いかにも自分は会社の歯車で使われてますという感じがして嫌だったのだ。なのに、今では独り言が口を突いて出ない日はない。

いつの間にかオフィスはあちらこちら消灯して、自分のいるデスクの周りにはもう誰もいない。

世の中は「働き方革命」だか「働き方改革」だかで、いろんな議論がされてるけれど、現実はこちらだ。

誰かが自分の代わりに大変な仕事、やつかいなことを引き受けてくれるわけでもなければ、ある日突然、働かなくても給料が月100万円もらえるようになるわけでもない。

なんだかんだ言っても、上司は文句言わず仕事をこなして結果を出してくる部下のこと

を評価するし、それで組織はなんとか回ってるものだ。

それに僕は、絶対に他のやつらに負けたくない。ものすごく飛び抜けたとも思わないけれど、少なくとも「できないやつ」とは思われなくなかった。

同僚の中には、仕事も組織の人間関係も適当にうまくやって、できるだけ大変な仕事や面倒な頼まれごとは避けたいと考えて実際そうやってるやつもいるけれど、そういうのと一緒にされるのもごめんのだ。

そんな感じだから「あいつは仕事人間だ」と言われることもある。そういうのは言わせておけばいい。

新卒でこの会社に入った頃、先輩に言われた言葉はずっと忘れられない。

「自分、勘違いしたらあかんぞ。就活でこれまでちやほやされてきたかしらんけど、そんな自分らが学生いう「お客さん」やったからやからな。上から今年はこんだけ採れつてミッションがあつて、それ達成せな担当者の評価に関わってくるからな。

せやから、他に取られへんようにちやほやもされるよ。それを勘違いして、会社に入つてからも大事にしてもらえない思つたら大間違いや。会社いうところは、仕事ができるやつは

大事にされるけど、できんやつはいらん。よう覚えとけよ」

若干、関西弁で言われたことにビビったけれど、その先輩の言うことはもつともだと思つた。それ以来、周りが嫌がるような仕事でも僕は嫌がらずにやってきましたつもりだ。

今、僕が取り組んでいるプロジェクトだつてそうだ。これまで製品のプロモーションや顧客からの問い合わせ対応など、ほとんど内部でやっていたことをアウトソーシングする。

それも単なる外注化ではなく、クラウドソーシング（不特定多数の外部のスキルを持った人への業務委託）のサイトを立ち上げて、その中でやってもらおうという試みだ。これまで、なんでもかんでも自分たちでやっていたけれど、プロモーションの実行やフォローに労力を取られ、肝心の営業に時間を割けないのが悩みだった。

だからといってただ単にアウトソーシングしたのでは、そこでの仕事の質を担保するのが難しい。顧客の評判が下がつてしまつて、クレーム対応に時間を取られるようなことになれば本末転倒になってしまう。

そこでクラウドソーシングで、外部にもうひとつの「顧客サービス部」ともいうべき部署を立ち上げ対応してもらうのだ。世の中には、もともとさまざまな業種で顧客対応をし

てきた経験とスキルのある人たちがいて、今は子育てや介護などの事情でフルタイムでは働けない人がいる。

そうした人でも、自分の都合の付く時間に、自分が培ってきたスキルを活かせたらいいと考えている人は少なくない。

そのマッチングとディレクションをチャットを使ってできる仕組みを、これもまたクラウドソーシングで募集したエンジニアに開発してもらったのだ。

手をあげてくれたのはカズさんという30代の男性システムエンジニアだった。

クラウドソーシングサイトに出したプロジェクト案件の情報を、正確かつ素早くこちらの要望を把握して具体的な要件定義をしてくれただけでなく、クラウド上（この場合のクラウドは、どこからでもアクセスできてデータを共有できる環境を指す）の顧客サービス部のイメージまでデザインしてくれた。しかもほんの数日で。

こんなのを社内でやっていたら、いろんな調整や確認をするだけで数週間は過ぎてしまう。

きつと仕事ができる一匹狼みたいなフリーのシステムエンジニアなのだろう。そんなふうに仕事ができる人に憧れる部分もあるけれど、さすがにハードルが高い。なにより「会社」

という存在から離れて自分の身体と頭だけを武器に戦うなんて、正直想像ができなかった。もちろん僕だつて、今の会社に100%満足なんかしていない。ときには、なんでこうなるんだ？という理不尽とまでいかなくとも納得できないことも起こる。

まあ、ただ会社なんてそんなものだし、自分のスキルを会社に頼らずにお金にできる人、それで豊かに生きられる人なんて特別な才能を持った人のことだ。

そう思っていた。カズさんと謎の黒いブタに出会うまでは――。

3つの財布の謎

明日のミーティングで確認したいことをまとめて、ほとんど誰もいなくなったオフィスからようやく退出しようとしたときだった。

スマホにメッセージが届いた。クラウドソーシングでもうひとつの「顧客サービス部」

のシステムをつくってくれたカズさんからだ。

《おつかれさまです。よかつたら、ちよつと飲んでいきませんか？》

そういえばプロジェクトが一応無事に走り始めたあと、具体的な業務はカズさんが取りまとめてくれたチームに任せていたので、カズさんとは直接やりとりをすることも少なくなっていた。

もちろん僕も情報や状況は共有していたけれど、特に問題もないようだったので安心してたのだ。それなのに、こんな時間にカズさんが僕を飲みを誘ってくるというのは何か問題でも起こったのだろうか？

少し不安を覚えながらも、少しの時間なら僕はカズさんがいるというバーに出向いた。

バーカウンターの反対側の背の高いテーブルに座っていたカズさんが、僕を見つけて声をかけてきた。

「あ、おつかれさまです。というか、直接会うのって最初の顔合わせ以来ですね」

「おつかれさまです。そっか。そういえば、そうですね」

たしかにカズさんの言うように、このプロジェクトのキックオフで直接会ったほかは、具体的な打ち合わせや作業の進行はチャットやメールで行ってきたのだ。

「けど、今日はどうしたんですか？ 急に飲みに行きましようなんて。仕事は大丈夫なんですか？」

僕は、何か問題でもあるのではと、半分探りを入れる感じでカズさんに言った。

カズさんは、クールに笑いながら僕に「仕事終わりだから、まずはビールにしますか？」とたずねながら、お店の人に僕のビールと自分の分のワインを頼んだ。

「問題とかは何も。というかむしろ順調ですよ。たまには気分転換もしないと。それより、いつも仕事ばかりで大変じゃないですか？」

「僕ですか？」

「そう。なんだかいつも大変そうな感じがして」

一瞬、ちょっとムツとしたが、そのとおりで痛いとこを突かれたような気がした。

「いや、まあたしかに大変ですけど。会社で働いていたら仕方ないですよ。上から急に振られた仕事もやりながら自分の仕事もやらないといけないし」

そりゃカズさんはフリーの一匹狼でやってるから、仕事以外の時間だつてこうやって自由につくれるんだからいいよなと、僕は多少のうらやましさも込めて言った。

「私だつて似たようなものですよ」

「え、カズさんがですか？ だつてカズさんはフリーでやってるんじゃない……」

僕は最初のキックオフのときにカズさんにもらった名刺を思い出した。たしか、そこにはシンプルなデザインでシステムエンジニアという肩書と「KAZU」という愛称しか書かれていなかった。

「あ、それは私の2つ目の財布の名刺ですね」

「2つ目の財布の名刺？」

「まあ、べつに隠してるわけでもないんですけど、私も一応、会社に属してる人間なんですよ」

そう言つてカズさんが教えてくれたのは、誰もが知つてそうなIT業界の社名だった。

「え、じゃあ内緒の副業つてことですか？」

「いいえ、全然内緒じゃないです。会社も知ってます。というか、むしろ会社からも奨励されてるんですよ」

「副業することをですか？」

「そうです。その理由はいろいろありますが、これからの時代はそのほうが会社にも働く個人にもプラスが大きいからですよ」

副業するほうが会社にも個人にもプラスが大きい？ 僕はカズさんの言っていることがよくわからなかった。たしかに副業で収入が増えれば個人的にはプラスになる。だけど、それを会社が勧める理由なんてあるのだろうか。

むしろ、そんなことをみんながやり出したら、会社の仕事がおぎなりになってしまいうんじやないか。

僕が解せない顔をしているのがわかったのか、カズさんはスマホを取り出し、僕にこんなタイトルのフェイスブックグループを見せてくれた。

《ハイブリッドワーク研究会》

「ハイブリッドワークって最新技術の研究か何かやってるんですか？」

僕が真顔でそう言ったのがおかしかったのか、カズさんは笑いながら「違いますよ」と言った。「まあ、でもある意味では最新ですね。いろんな異なる仕事を掛け合わせて、3つの財布を持った新しい豊かな生き方を現実にやろうとしてるわけですから」

「3つの財布ですか……」

さつきカズさんはフリーで受けているエンジニアの仕事は“2つ目の財布”だと言っていた。それ以外にもうひとつ副業をしているのだろうか。

「もちろん財布を3つ持ち歩いてるわけじゃないですよ」

僕がまた変なことを言うとも思ったのか、カズさんは先回りして僕以上に変なことを言う。

「じゃ、どういう意味の財布なんですか？」

「説明するより、見てもらったほうが早いかもしれないですね。フェイスブックやってます？」

僕が、フェイスブックをやっていることを伝えると、先ほどの《ハイブリッドワーク研究会》のグループに僕を招待してくれた。

「もし、見てもらって興味があればですけど、いろいろ勉強会とかイベントとかもやってるんで参加してもらえれば……あ、電話だ」

詳しく説明してくれようとしていたときに、カズさんに電話が入り、急ぎの用件ができたということで「ここは私が払っておきますから」と言い残して笑顔で手を振って店を出て行った。

サラリーマンの壁と黒い布タ

3つの財布か……。カズさんと別れて店を出たあとも、僕はカズさんが言っていた「3つの財布」の話が気になっていた。

てつきりフリーランスの自営業だと思っていたカズさんが、自分と同じようなサラリーマンをやりながら副業でも仕事をしているという。

副業というと、よほどお金に困っている人か、店でも持ちたいとかそういう何かの資金

を貯めるためにやるものというイメージだったが、どうもカズさんを見ている限りそんなふうには見えない。

どちらかというところ、そんなスタイルを楽しんでいるようにさえ見えた。それに、副業で収入があるだけなら本業の給料と合わせて2つ財布があるだけだ。けれど、カズさんは3つの財布があると言っていた。しかも、それで新しい豊かな生き方を現実にやっているという。

独り暮らしの部屋に帰るため電車に乗ってからも、ずっとカズさんの妙に余裕のある雰囲気はどこから来ているのだろうかと考えていた。電車内を見渡しても、ほとんどの人が今の自分の働き方と生活を守るために一杯いっぱい、それ以上の余裕なんか見えないように見えてしまう。

ほぼ全員が俯きながらスマホの画面をじっと見ている。その無表情に隠されているために本当の顔は見えないけれど、どこかに、このままでいいのだろうかという疑問と、でもどうすることもできないという「壁」のようなものを感じてしまう。

吊り革につかまって、そんなことをぼんやり考えていたら、カズさんが招待してくれた

フェイスブックグループのことを思い出した。

スマホを取り出して《ハイブリッドワーク研究会》の過去のタイムラインを辿ってみると、思わず「なんだろうこれは」と衝撃を受けた。

講師らしき人物を前に真面目に何かを学んでいる投稿があったり、そうかと思うと結構セレブっぽいタワーマンションの一室でパーティーをしている投稿があったりして、いろいろ活動しているみたいだ。

そうかと思えばカズさんの自分のタイムラインには、高級そうなクルマに乗って、海辺のリゾート地にあるレストランに出かけている写真がアップされていたりする。

いくらカズさんが仕事ができる人で副業もやっているといても、一応会社員で、そんなセレブ層に属しているとは思えない。僕と違ってそんなに年齢も変わらないのに、この違いは何なのだろう。

僕は、それ以上眩しいタイムラインを眺めていられなくなり、スマホを消した。

——数日後。

僕にとつては久しぶりに仕事のない週末。こここのところ例のプロジェクトやそれ以外に

も上司から振られた仕事をこなすために、週末も仕事に埋もれていたのだ。

その間、頭の片隅では彼女のことにも気になっていた。しばらく、まともに一緒の時間も過ごしていない。メッセンジャーでたまにひと言ふた言、他愛もないことを送っても既読のまま。

彼女も働いていて忙しいのはわかっているので仕方ないと思っていたけれど、さすがに3週間も音沙汰がないと心配になり、なんとか一緒にカフェでランチをすることにしよう。だ。

ところが久しぶりに会った彼女は、僕の顔をまともに見ようとしない。食事をしながらも、ほとんど彼女からしゃべることもなく、僕が何かを聞いても俯き加減に短く「うん」「べつに」と答えるだけ。

にぎやかな週末のカフェで、僕と彼女のテーブルにだけ気まずい時間だけが流れていた。僕が「……出ようか」と言っても、彼女は席を立つ様子もない。仕方なく僕も手持無沙汰に座ったままになる。きつと周りからは、あのカップル何？と思われているんだろう。など考えながら、僕は何でもないふりをして店内を見ていた。

「もう嫌だ」

突然、彼女が何かを吐き出すように言った。

「え？ 何？」

動揺する僕に彼女は「ほんと、あなただってなんにも自分で決められないし、何も変えようとしなない。ずっとこのままだよ。忙しい忙しいって。私を幸せにしてくれるんじゃないのか？ もういい！」と言い捨てて席を立った。

あわててレジで会計をしてカフェの外に出たけれど、もう彼女の姿はない。メッセージャーも電話もそれっきり何も反応がなかった。

ズタズタになった気分で僕は自分の部屋に帰った。彼女が言い放った「ずっとこのままだよ」という言葉が、何度も何度も脳内再生される。

僕だって、このままでいいなんて1ミリも思っていない。できることなら、もつと今より良くなりたい。経済的にも時間的にも自由で豊かな生活がしたいよ。おしゃれなイタリアンでインスタ映えるキラキラ写真をインスタグラムにアップだってみてほしい。

だけど現実にはそんなのどうすればいい？ 日々の仕事に追われて、たいして年収だつて増えないどころか、一歩間違えれば世界経済の渦に巻き込まれて会社だつてどうなるかわからないのに。

おまけに最近の若手は自分の仕事だけきつさと片づけて、他の仕事を頼もうとしても「それ僕の担当じゃないつすから」と簡単に断ってくる。結局、いつも僕らが余計な仕事も背負い込んでいるのに、そういうことを会社は評価もしない。あくまで成果を出してナンボなのだ。

ふと、カズさんの顔が思い浮かぶ。自分では会社に依存してるつもりはない。だけど、このままただ仕事をし続けているだけでいいのだろうか――。

そう強く思ったその瞬間、「Ciao（チャオ）！」とドアを開けて何かが入ってきた。ブタだ。それも黒いブタだ。おまけに、なぜか二足歩行で洒落たスーツを着こなしている。そして手にはピザの箱。いや、豚足というべきか。

うわ。とうとう僕も悩みすぎて妄想の世界に入り込んでしまったのかも。疲れてる。夢でもないのに、こんなよくわからないものを見てしまった僕は明らかに疲れてる。

僕が安然としてみると、黒いブタは丸い縁取りのサングラスを外しながら「今、呼んだよね？」と僕に言った。

「呼んでないですよ。つていうか、誰ですか？そもそもピザなんか頼んでないし」

「いやいや、おしやれなイタリアンって叫んでましたよ兄さん！ だから俺、呼ばれたのかと」

「は？」

黒いブタはキラリと目を光らせながら僕にピザの箱を渡し、つかつかと部屋に入ってくる。

いやいや、ちょ、ちょっと待って。

「大丈夫だよ、フラテッコ（兄弟）！ 俺が教えてやるからさ！」と言うと、僕に強くハグをしてきた。

「な、なんなんだよ、お前……」

「俺かい？ 俺は『ブラヒ』さっ！」と、黒いブタは謎の決めポーズをしてみせた。

おかしい。絶対に何かがおかしい。異世界に召喚されたのなら、せめて美女がやって来るほうが……。

こうして僕の人生をガラッと変える数か月が始まったのだ。